



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	知的障害を伴う自閉症児における選択行動の特徴と支援： 見本合わせ課題場面の選択行動連鎖の検討と形成指導に 基づく研究(論文要旨)
Author(s)	原田, 晋吾
Citation	
Issue Date	2018-09-25
URL	http://hdl.handle.net/2309/150388
Publisher	
Rights	

氏 名 : 原田 晋吾
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)
学位記番号 : 博甲第 312 号
学位授与年月日 : 平成 30 年 9 月 25 日
学位授与の要件 : 学位規則第 4 条第 1 項該当 課程博士
学位論文名 : 知的障害を伴う自閉症児における選択行動の特徴と支援
—見本合わせ課題場面の選択行動連鎖の検討と形成指導
に基づく研究—
論文審査委員 : (主査) 教授 小池 敏英
(副査) 教授 松田 恵示 教授 渡部 匡隆
准教授 山中 冴子 教授 葉石 光一

学 位 論 文 要 旨

事物や活動を選択したり決定したりする機会やその能力は、その人の自立や尊厳を反映するものである。しかし、知的障害のある人々は、日常生活の自然な環境のなかで自己選択行動を学習するのに困難を示し、自己選択が良い結果をもたらすことを経験する機会を得にくい。知的障害のある人々の自立を実現する上で、周囲の人々が多くの選択機会を提供することは重要である。他方、選択機会が提供されても、知的障害のある人々の自己決定は多くの障壁に阻まれている。特に知的障害を伴う自閉症者は、言語や指差し、視線を媒介とした選択行動が困難であることに加え、対人行動の弱さを示すため、周囲の介助者に対する選択行動の表出に大きな制約を伴う。しかし、知的障害を伴う自閉症者における選択行動の特徴を検討した研究は少ない。本研究では、知的障害を伴う自閉症児の選択行動の特徴及び、選択行動の学習を阻害する要因を検討し、要因に合わせた支援方法の手がかりを得ることを目的とした。

本論では、はじめに、特別支援学校小学部から高等部の児童生徒の選択行動の特性に関する質問紙調査を実施した。調査の結果から、最重度・重度知的障害を伴う自閉症児は、選択場面で選択肢を注視することに弱さを示すことがわかった。その中でも特に、要求発達の初期段階である要求実践段階の事例において、選択肢への注視の困難を顕著に示すことを指摘した(本論第 1 章)。一方で、最重度・重度知的障害を伴う自閉症児の中でも、他者への要求伝達が可能である要求伝達段階の事例が示す選択肢への注視の様相は、MA マッチングした定型発達児との比較において、差をみとめなかった。この結果から、最重度・重度知的障害を伴う自閉症児のうち、要求伝達段階にある事例では、複数の情報源に対する注視や見比べという点に関して、MA マッチングした定型発達児と同等の力を有していることがわかった。これより、最重度・重度知的障害を伴う自閉症児の言語発達において、複数の情報源を注視して情報を取得することは、要求表出段階から要求伝達段階への移行を促す一要因であることを指摘した(本論第 2 章第 1 節)。次に、最重度・重度知的障害を伴う自閉症児が示す行動上の問題について、選択課題の難易度との関連で検討を行った。選択課題未達成の児は、選択課題の難易度に関わらず選択肢への注視時間が短く、限られた情報入力の前で選択課題を遂行していた。難易度の低い選択課題では、正刺激選択率が高まり、課題非関連行動や行動問題の生起率が低くなることを指摘した(本論第 2 章第 2 節)。これら

の結果を受けて、選択肢への注視や見比べに困難を示す要求表出段階の自閉症児 1 名を対象とした実践研究を行った。指導者による先行子操作や強化操作によって対象児の注視や見比べ行動が増加し、対象児は複数の情報源から強化を得られるようになった。本事例で報告した行動変容は、要求伝達における発達的变化として捉えられることを指摘した（本論第 2 章第 3 節）。最後に、一定程度のコミュニケーションを獲得している中度知的障害を伴う自閉症児を対象に、選択肢のなかに存在する未知項目について他者に質問する社会的行動、すなわち情報請求行動の形成実践を行った（第 2 部第 3 章）。情報請求行動を指導によって、対象児の課題正答率が上昇したことを報告した。2 つの事例研究では、入力情報の制約を外すことによって、対象児の課題非関連行動や行動問題の生起率が低減するという共通した結果を得た。これより、知的障害を伴う自閉症児が選択課題中に示す課題非関連行動や行動問題は、選択の行動連鎖の遂行困難が一要因となっていることを指摘した。課題非関連行動や行動問題は、選択に関する行動連鎖の形成指導を進めることや、選択場面で生じた問題を解決するための社会的スキルを形成することによって軽減することを明らかにした。

本研究は、知的障害を伴う自閉症児を対象に、選択行動の行動連鎖の観点から選択行動形成を阻害する要因について検討した。対象者が遂行を困難としている行動要素に対して直接的な強化学習を導入することにより、対象者の選択行動の精度を高めることが可能であることを指摘した。選択行動の遂行が可能となるような仕組みを指導者や支援者が外的に作り出し強化することが、最重度・重度知的障害を伴う自閉症児の自己選択や要求伝達を支援するうえで重要である。